Copyright George Cockle

レコード・コレクターズ / ミュージック・マガジン
String Them Along No.18

1. ”Poor Side Of Time" Johnny Rivers 1966
2. "Patches" Clarence Carter
3. "Coat Of Many Colors" Dolly Parton
4. "Fortunate Son" Creedence Clearwater Revival
5. "Money For Nothing" Dire Straits

　アメリカの音楽は貧しいキャラクターが出てくる曲が多い。それはきっとそういった貧しい世界から立ち上がったハングリーなミュージシャン達が多いからだろう。最近、ジョニー・リヴァースのボックスセットを手に入れ、彼らのすばらしさにもう一度心を向けた。そのなかの1966年の曲「Poor Side Of Town」は、今回の連載のテーマのきっかけになった曲だ。Poor Side Of Townは街の貧乏側と言う意味だ。日本語にすると直訳すると変だが、アメリカではよく使われる言葉で、鉄道の線路がその境目になっていることが多い。この曲はロック一辺倒だったジョニーが、ポップ系に転身したときの一曲めだ。彼はトップテンのヒット曲（Memphis, Mountain Of Love, Seventh Son, Secret Agent Man)を何曲か出していたが、この曲で彼は初めてナンバーワンを手にした。曲の内容は、主人公の男が彼女を金持ちの男に取られたが、すぐに振られて戻ってくる話だ。
最初に
「How can you tell me how much you miss me, when the last time I saw you, you wouldn't even kiss me」（あなたはよく俺のことが恋しかったと言うな。俺達が最後に会ったときはキスもしてくれなかったのに。）
「That rich guy you've been seeing' must have put you down」（つき合っていたリッチな男に、蔑まれたんだろう。）この「put you down」の

Copyright George Cockle

意味は馬鹿にされる、蔑まれると言う意味だ。しかし、ここで主人公は彼女を責めず、受け入れる。

「So welcome back baby to the poor side of town」（ようこそ、街の貧乏側に。）

次のヴァースでは主人公が彼女にこう言う。あなたは彼にとってただの遊びだったんだ、一晩のことだけ。そこで自分の気持ちを伝える。

「To me you were the greatest thing this boy has ever found」

その金持ちと違って、この女性はこの男の人生にとって、一番すばらしい物だった。そして、彼女にこう言う。街の貧乏側では、いいものを探すのが難しいんだと。ここではっきり分かるのは、主人公は彼女を全然責めていないことだ。女性がたとえ男を使ってでも、この世界から這い上がろうとしていることは攻めない、俺もそうだからね。ただ一つだけ分かってくれ。俺はあなたがいないとやっていけないんだ）。

最後のヴァースでは彼女に質問をする。

「So tell me, are you gonna stay now」（一緒にいてくれるか？）

「Will you stand by me girl all the way」（俺と永遠に一緒にいてくれるか？）

「Together we can make it baby from the poor side of town 」(俺達2人で一緒にいたら、うまくやっていける)

これはうまく行くだけじゃなくて、もしかしたら、俺達がここから逃げ出せるかもしれないとう意味だ。ここで、ジョニーの声ではなく女性コーラスが入る。

「So tell me how much you love me, come be near to me and say you need me now」(俺をどのくらい愛しているか言ってくれ、そばにいて、俺のことが必要だと言ってくれ）。

女性の答えを聞くに聞けない男の気持ちを表すように、天使みたいな女性コーラスが入るのがおもしろい。

Copyright George Cockle

　ドリー・パートンは60年代、ポーター・ワゴナーとのデュエットで何曲かのナンバーワンをとったが、1971年に「Coat Of Many Colors」で、初めてソロでヒットを出した。アメリカのカントリーチャートでは17位までしか上がらなかったが、彼女の代表作の一つになった。そして2012年には、アメリカの米国議会図書館が母国の生活や生命、文化、歴史を反映する曲として贈る、ナショナル・レコーディング・レジストリーに選ばれた。この曲は貧しい幼少期を送ったドリーの実話だ。タイトルは聖書に出てくる話「Joseph's Coat Of Many Colors」（ヨセフのコート）に由来している。ドリーは子供の頃、コートも買えないぐらい貧しい生活だったが、ある日お母さんが誰かからもらった、小さくてボロボロな布地を組み合わせてコートを作ってくれた。
　お母さんはコートを縫いながら、聖書のヨセフの話をしてくれて、こう言った。
「Perhaps this coat will bring you luck and happiness」(たぶん、このコートはあなたに運と幸せを持ってきてくれるわ）。
ドリーはコートが出来上がるのが待ちきれなかった。そしてお母さんがボロ布で作ってくれた、色とりどりのコートをプライドを持って着た。
「Although we had no money, I was rich as I could be, in my coat of many colors my momma made for me」(私達はお金はなかったけど、お母さんが作ってくれた、色とりどりのコートを着て、私は考えられないほどリッチだった。）このリッチはお金があるだけの意味ではなくて、心が豊かだと言う意味もある。ドリーが「Patches on my britches」(ズボンにパッチつけて)
穴が空いている靴を履いて、そのコートを着て学校にいったら、皆が彼女のことを笑い始め、いじめられてしまった。
ここでもう一度

Copyright George Cockle

「In my coat of many colors my momma made for me」（お母さんが作ってくれた、色とりどりのコートを着て）
「I couldn't understand it for I felt i was rich」(私は分からなかった、だってリッチな気持ちだったから）
そして、みんなに言った。このコートはお母さんが愛を込めて作ってくれたから、皆が着ている服より価値があると。
最後のヴァースでは皆がコートの価値が分からないことを不思議がっている。
「That one is only poor only if they choose to be」（貧乏は、貧乏だと思って行きて行くことを選んだだけ）
そして、心豊かに生きて行けば、生活は豊かになるのよと歌っている。
　この曲に出てくるコートはドリーが経営するドリーランドという博物館に飾ってあり、そばにはオリジナルの歌詞が書かれた紙も添えられてある。これはツアーの移動中のバスの中、ドライクリーニングの請求書の裏に走り書きしたものだ。これはその請求書の持ち主であるデュエットのパートナー、ポーター・ワゴナーが寄付したものだ。

　今度はアラバマ州の農場で暮らす貧しい家族を歌った「Patches」だ。
　元々はチェアメン・オブ・ザ・ボードの曲だったが、この曲を聞いたクラレンス・カーターは自分のバージョンをレコーディングした。1970年に出した彼のバージョンはカントリー・ソウルというスタイルで呼ばれ、ホット100の4位、R＆Bチャートは２位になり、1971年にはベストR＆Bソングでグラミーを取った。目が不自由だったクラレンスのパフォーマンスはとてもピュアでリアルなので、聞いた人々は彼自身のストーリーだと思ったほどだ。でも彼はアラバマ生まれだったものの、目が見えなかったので農場で働いたことはな

Copyright George Cockle

かった。歌詞はこうだ。主人公はアラバマの農場で生まれて育った、あまりにも服がボロボロだったから、パッチェスと呼ばれていた。パッチェスはパッチ（当て布）のことだけど、お金がない子供達のあだ名になることが多い。洋服がボロボロでツギハギだらけだからだ。
サビは父が亡くなる時、
「Patches I'm dependin' on you son」（パッチェス、君を頼る）
つまり父に家族のことを頼まれたのだ。そこで母に学校を辞めて仕事すると言ったが、お父さんの望みだから学校やめては行けないと言われる。
そこで彼は朝、学校に行く前に農場の仕事をした。母も毎晩、神様に拝んで助けを求めていた。でも母も天国へ行ってしまい，一番年上な彼が家族のことを見守ることになる。何回もあきらめようと思ったが、その時、いつも父の声が流れてくる。
Patches I'm dependin' on you son」（パッチェス、君を頼る）
このサビの繰り返しで、曲は終わっていく。まるで、彼の大変な人生は永遠と続くように。がんばってもその貧しいサイクルから逃げ出せないんだ。

　今度は同じプアな世界でも、今度はブルーカラーの人々を歌った曲を紹介しよう。
　ダイアー・ストレイツの1985年のビルボードでナンバーワンになった「Money For Nothing」だ。この曲はリーダーのマークが家電屋で、何台かのテレビから流れていたMTVを見てたときに思い浮かんだ歌だそうだ。その時ブルーカラーの人達が一緒で、その人達の言葉から曲は生まれた。曲の内容はこうだ。
ミュージシャンが出ているテレビを見て、ブルーカラーの主人公はちょっとうらやましい気分になっている。
曲の一行目はスティングの

Copyright George Cockle

「I want my MTV」から始まる。ヴァースは「Now look at them yo yo's that's the way you do it, you play the guitar on the MTV」(あのヨーヨー達を見てごらん、MTVでギターを弾くんだ）。
ヨーヨーとはあの間抜けのやろうと言う意味だ。次の歌詞はアメリカの若者達がよく使う言葉だ。
「That ain't workin', that's the way you do it, money for nothing, chicks for free」（あれは仕事じゃないよ。何もしないでお金が入り、女はただでついてくる）これはブルーカラーの男が、ギターを弾いているだけでお金が入ってきていいなと思っているんだ。でも主人公は否定していない。「them guys ain't dumb」(あいつらは間抜けじゃない）ここからサビに入る。
このサビの歌詞は主人公が自分の仲間に仕事の指示を出している。
「we gotto install microwave ovens, custom kitchen deliveries, we gotto move these refrigerators, we gotto move these color tv's」（電子レンジをインストールしないと、カスタムキッチンの配達、この冷蔵庫を動かさないと。カラーテレビを動かさないと。）
彼らの仕事場は家電やで、仕事をしながらテレビを見て、話をしている。次にこう続く。
「See that little faggot」(おい見てごらん、このホモ）「faggot」はスラングでホモのこと。
この歌詞でこの曲はカナダで放送禁止になってしまった。法律に引っかかったようだ。そのホモは、ロングヘアで、ピアスとメークしている。あのホモは自家製飛行機持っている大金持ちだ、と歌ってブルーカラーは仕事を続ける。またサビが入る。
ここで、主人公は
「I　shoulda learned to play the guitar, I shoulda learned to play them drums」（俺もギターを習えば良かった、ドラムを習えば良かった。）

Copyright George Cockle

歌詞は続く。何だ、あのハワイアンの音、チンパンジーみたいにボンゴドラムをたたえている。
そして、また仲間に仕事をしないと、と言っている。
「we gotto install microwave ovens, custom kitchen deliveries, we gotto move these refrigerators, we gotto move these color tv's」（電子レンジをインストールしないと、カスタム・キッチンの配達、この冷蔵庫を動かさないと、カラーテレビを動かさないと）。
「That ain't workin', that's the way you do it, money for nothing, chicks for free」
　この曲はマーク・ノプラーとスティングの共作になっているが、スティングに言わせると彼は「I want my MTV」しか書いていないと言っているそうだ。そのフレーズもスティングの曲「Don't stand so close to me」と同じメロディーだ。しかも象徴的なギターリフの音は、リーダーのマーク・ノプラーが、ZZトップのギターの音をコピーしたようだ。とはいえ、この曲1986年のベストグループ・デゥオ・パーフォーマンスのグラミーを取っているのだから、あっぱれだ。

　最後はベトナムの反戦を歌った曲、クリーデンス・クリアウォーター・リバイバルの「Fortunate Son」だ。金があれば戦争に行かなくて良かったと歌う。1969年の曲だが、今でも聞くと戦争というものを考えさせられる曲だ。
　ドリー・パートンの曲と同じく、2012年に、米国議会図書館の国家記録レジストリに登録された。ベトナム戦争の時代は徴兵制度があったが、金持ちは法律をすり抜けて行かなくても済んだ。例えば、大学に行っていたら、徴兵に行かなくて良かった。だからこそ、裕福な家の若者達は大学に行き、貧困層の若者達は徴兵されてしまった。
曲では、ある人達は戦争を応援するための旗を振るべく生まれてきていると歌う。

Copyright George Cockle

「Ooo, they're red ,white and blue」（彼らは赤白青だ）。
これはアメリカの国旗の三つの色。
「And when the band plays Hail To The Chief」(バンドがヘイル・ツ・ザ・チイフを演奏する）
「They point the canon at you」（大砲を皆に向ける）
このヘイル・ツ・ザ・チイフはアメリカの大統領が出てくる時にかかる曲だ。
サビは３回あるが、ひとつの言葉がsenator's son（上院議員の息子）、億万長者の息子、軍人の息子と変わる。
最初はこうだ。
「It ain't me, it ain't me I ain't no senator's son, it ain't me, it ain't me I ain't no fortiunate son」(俺じゃないよ、俺じゃないよ、俺は上院議員の息子ではない、俺じゃないよ、俺じゃないよ、俺は恵まれている息子ではない)
次のヴァースでは、
「Some folks are born with a silver spoon in hand」(生まれたときからシルバースプーンを手に持っている）
このシルバースプーンはお金持ちやコネがある人達のことだ。
歌詞は続く。
「But when the taxman comes to the door, lord the house looks like a rummage sale」（でも、税務署が訪ねてくると、家はガレージセールに見える。）
これは税金を払いたくないから金がないように見せるため、ガレージセールのように家をグチャグチャにするという意味だ。
最後のヴァースでは
「Some people inherit star spangeld eyes」（スタースパングルした目を受け継いでいる人達もいる）
このスタースパングルはアメリカの国旗のこと。つまりアメリカの特権を持っていながら、戦争には行かない人達のことだ。彼らは俺達

Copyright George Cockle

みたいな金持ちじゃない若者を戦争に送ってしまう。彼らにどこまで（命を）あげればいいのかと聞くと、もっと、もっともっと答える。
ここでもう一度サビの一部を軍人に変えている。
「It ain't me, it ain't me I ain't no military''s son, it ain't me, it ain't me I ain't no fortiunate son」